

聖書：Ⅱサムエル 20：1～26

説教題：シェバの反乱

日時：2019年2月10日（夕拝）

サムエル記第二は24章までありますが、最後の21～24章は20章までと区別されません。最後の4章はサムエル記を閉じるにあたっての結びあるいは付録の部分です。ですから今日の20章が、これまでの一連の歴史的記述の最後の部分になります。ダビデのバテ・シェバとの姦淫の罪から始まったこの書の後半部はどういう結末に至ったのか、その視点を持ちながら、この章を読みたいと思います。

大きく分けてこの章には4つのことが記されています。その第一は1～7節までのシェバの反乱です。前の19章でダビデのエルサレム帰還が急速に導かれました。ダビデに謀反を起こした三男アブサロムは死に、皆がダビデの王位復帰を望むようになりました。そこでダビデはヨルダン川の東側の地に逃げていましたが、ヨルダン川を東から西へと渡り、エルサレムへ進んで行こうとしたその時、まさかの内紛がイスラエル内で起こってしまいました。ダビデを王として迎えようと最初に言い出したイスラエル北側の諸部族と、先にヨルダン川へとダビデを迎えに出て一緒に渡った彼の出身部族ユダ族との間に、争いが生じたのです。互いに激しい調子で相手を非難するようになってしまいました。もう少しでイスラエル全体の平和的統一がなされようとしたのに。

この北と南の対立的雰囲気に乗じて一層の混乱を引き起こしたのは1節の「よこしまな者で、名をシェバ」という人物でした。彼はベニヤミン人ビクリの息子で、ベニヤミン人と言えばサウルの出身部族です。ダビデのことを必ずしも良く思っていないサウル家の人々の気持ちも煽って、彼はこの反乱を企てたのかもしれませんが。彼は角笛を吹きながら、こう言います。「ダビデのうちには、われわれのための割り当て地はない。エッサイの子のうちには、われわれのためのゆずりの地はない。イスラエルよ、それぞれ自分の天幕に帰れ。」こう述べて、自分たちは自分たちで王を立ててダビデに対抗しようと呼びかけます。この結果、イスラエル北側の諸部族はダビデから離れてビクリの子シェバに従います。一方の南側のユダ族はダビデとともにエルサレムへと進みます。

そのダビデがエルサレムでいたことが3節に記されています。王宮には留守番に残し

ていた 10 人のそばめたちがいましたが、ダビデは彼女たちのところに通わなかったとあります。すでに見ましたように、アブサロムはダビデをエルサレムから追い出した後、この 10 人のそばめたちを取り、屋上に天幕を張って彼女たちと寝るということをしました。これはダビデの罪に対する報いでもありました。ダビデが人の妻を取り上げたように、ダビデも自分の妻たちを取り上げられる。そのダビデはエルサレムに帰って来ても、とても彼女たちのところに通う気にはなれなかったのでしょう。自分の罪を思い起こさせられるだけです。こうして彼女たちはあわれな犠牲者となったのです。ダビデの罪がもたらした悲劇の一つでした。

二つ目に記されているのはヨアブによるアマサ暗殺です。前の章でダビデはユダ部族と和解する時、彼らの将軍アマサを自らの軍の将軍にすると約束しました。そのアマサにダビデは 4 節で戦いの準備を命じます。しかし彼は指定された日まで準備ができませんでした。ダビデはいつまでも待っているわけにもいかず、アビシャイに軍の統率を指示します。ここで興味深いのは、なぜダビデはこれまでの将軍ヨアブにこれを命じなかったのかということです。ここにダビデがヨアブを良く思っていなかったことが暗示されています。ヨアブは有能な将軍で多くの成果をあげて来た軍人ですが、必ずしもダビデと心が一致している人ではありませんでした。ダビデの意に反して勝手なことを強引にやってしまう人でした。以前もアブネルというサウルの将軍がダビデの臣下になろうとすると、彼をライバルと見て暗殺しました。そして何と言ってもダビデの心に刻まれていたのはアブサロムを殺したことでしょう。あれだけアブサロムをゆるやかに扱ってくれ！と頼んでおいたのに、ヨアブは無視してアブサロムを殺した。こういう彼を将軍にしておいたら何をしでかすか分からない。この状況で面白くないのはヨアブです。彼は 8 節以降で合流したアマサを見つけると、「兄弟、おまえは無事か」と挨拶し、口づけするように見せかけてひげをつかみ、その間に下腹を剣で突いて暗殺します。この一突きでアマサは死にます。これを見てヨアブに仕える若者の一人が「ヨアブにつく者、ダビデに味方する者は、ヨアブに従え」と号令をかけると、人々は一気にヨアブに従うようになりました。7 節でダビデ軍は「アビシャイの後に続いた」と記されていたのに、13 節では「みなヨアブの後について進んだ」と記されています。こうしてヨアブは力づくで将軍の地位を奪い取ります。事態はダビデの思わぬ方向、願わぬ方向へと進みます。

三つ目に記されているのはシェバの最期です。ヨアブを将軍とするダビデ軍はビクリ

の子シェバを追い、ガリラヤ湖よりもずっと北方のイスラエルの北のはずれの町、アベル・ベテ・マアカまで追跡します。そしてこの町に向かって壘を築き、総攻撃しようと準備します。するとその時、町の中から一人の知恵ある女が出て来て叫びます。なぜこの町を飲み尽くそうとされるのですかと。ヨアブは、「とんでもない、我々はビクリの子シェバを狙っているだけだ」と答えます。すると彼女は、それならその男の首を城壁の上からあなたのところに投げ落としてご覧に入れますと言います。そしてさっそくそのことを実行します。民全員のところに行ってシェバの首をはね、それをヨアブのもとに投げたのです。一体どのようにしてそれができたのか。何ともあつけない最期です。まさかこんな方法で自分の命が終わることになるとは、ビクリの子シェバもビックリしたことでしょう！こうして一体どうなることかと当初は大変心配されたシェバの反乱は、それほど大きな問題とはならず、終わりとなったのです。

最後四つ目に記されているのは23～26節のダビデの閣僚名簿です。そのトップには、あのヨアブの名があります。ダビデは彼を退けようとしたが、彼はしっかりこの座に座っています。手ごわい存在です。しかしこのまとめの句は、これまで様々な出来事があったけれども、ダビデ王の国がこうして安定化に至ったことを示しているのではないのでしょうか。危機的な状況が次から次へと生じましたが、ダビデはエルサレムに戻り、その閣僚も整備され、ダビデ王国はついに安泰な状態へと至った。ここにどんなメッセージがあるのか、これまでのことを少し振り返ってまとめてみたいと思います。

私たちは11章以降、ダビデの姦淫の罪がどんなに大きな影響を、彼と彼の国にもたらしたかを見て来ました。ダビデは11章でバテ・シェバと姦淫の罪を犯し、その罪を隠蔽するため、彼女の夫ウリヤを戦争の前面に出させて殺しました。ダビデはその罪を、続く12章で預言者ナタンから指摘され、自分の罪を告白し、主から赦しの宣言をいただきました。しかし話はそれで終わりませんでした。その12章から今日の20章に至るまで記されたことはすべて彼の罪から発した諸々の出来事でした。ここに罪は、これほどの影響を後々の歩みにもたらすということが示されています。これだけ長い期間に渡る罪の刈り取りをダビデは強いられました。

具体的に彼の罪はどんな形でその後の生活に影響を与えたのでしょうか。その一つは社会的側面においてです。私たちが見て来たことは彼の罪が子どもたちにコピーされて行

ったことです。長男アムノンは性的不道德の罪を犯しました。異母姉妹のタマルを凌辱して家庭内に大変な混乱をもたらしました。また三男アブサロムはダビデの殺人罪をコピーしました。蛙の子は蛙。彼の罪はこうして思わぬ形で自分の子どもたちに、家族の間に、周りの者たちに伝染して行きました。さらに彼の罪は彼の心理的側面にも影響を与えました。彼は自分が罪を犯したために、同じ罪を犯した子どもたちに毅然とした対処ができませんでした。それによって一層の混乱を招きました。その結果、長男アムノンは失われ、三男アブサロムも失われました。またアブサロムの謀反により、イスラエルの間に分裂が生じます。それ以後、悲慘に次ぐ悲慘、争いに次ぐ争い。しかしこうした 11 章からの記述の最後に私たちが今日の章で見たことは何でしょうか。それはダビデのエルサレムへの復帰であり、閣僚たちの整備された名簿であり、それによるダビデ王国の安泰です。これは奇跡的な結末と言うべきではないでしょうか。これまでのダビデの姿を見る限り良いことはほとんどありません。彼の罪から生じた様々な混乱によって、いつダビデ王国が終わりとなってもおかしくありませんでした。いつ滅亡し、消え去ってもおかしくない状態でした。しかしこの 20 章最後において彼の王国はしっかりと立っています。必ずしも理想的状態とまでは言えないにしても。これはこのことがただ神の恵みによるということをお話しているのではないのでしょうか。ダビデ王国が保たれたのは、ダビデが立派だったからではなく、他の誰かが適切な働きをしたからでもなく、ただ一重に神の一方的な恩恵によるということではないのでしょうか。

このことが持つ意義について 2 つのことに短く触れて終わりたいと思います。一つはなぜ神はこのようにダビデを守り、彼の王国を支えてくださったのかということです。それは一言で言えば 7 章で見たダビデ契約のゆえです。主はそこで「わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。・・・わたしは彼の王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。」と言われました。これはやがてダビデから出るまことの王、メシヤを指す約束です。そのメシヤを通して神はご自分の民を祝福すると言われました。その約束を果たすために、神はダビデと彼の王国をこのように守ってくださったのです。ダビデの罪にも関わらず、このように彼を支えてくださったのは先の約束・契約を守ろうとされた神の熱心、神の恵みゆえと言う他ありません。

そして今のことと関連しますが、今日の箇所から学ぶもう一つのこととは神がダビデ王国をこのように守ってくださったという記録は、これが指し示すメシヤの国すなわちキ

リストの王国をも神は同じように守ってくださるということのイラストレーションとしての意味を持つということです。なぜ神はこのような罪人たちを滅びへと行くがままに任せず、むしろ守り、立たせ、祝福することができるのでしょうか。それはやがて遣わされるキリストの十字架のゆえです。イエス・キリストは私たちの代わりに十字架にかかり、私たちの罪を背負って私たちの代わりにさばきを受けてくださいました。その方に信頼することを通して私たちは罪を赦していただき、神に受け入れられ、神の祝福のうちを歩ませていただくことができます。ここにあらゆる罪に悩む私たちに対する神の解決があります。この恵みによって今日も私たちは立たせていただいています。私たち自身を見る限り、何らすぐれたところはないのに、むしろ自分の罪ゆえにさばきを刈り取り、混乱の内に滅んでも仕方のない者たちなのに、今日もこうして（何とかというレベルかもしれませんが）守られ、立たせていただいています。これはただただ神の一方的な恵み、イエス・キリストにおける恵みによることではないでしょうか。私たちはこの 20 章を読み終えるにあたり、今の自分にこのことを重ね合わせて神に感謝の礼拝をささげたいのです。私たちが今日、このように立ってられるのは、ただ一重に神の恵みに負っているのだと覚えて。そして神はこれまでと同様、これからもキリストの王国を最後まで守ってくださいます。そしてその中で私たち一人一人を生かしてくださいます。色々な混乱が目の前にあっても、また自分の罪との戦いや悩みがあっても、神が支えてくださる。そのことを信じて神がお送りくださったまことの王イエス・キリストに信頼し、従う歩みを続けて行きたいと思います。そして神がキリストにあってついに導き入れてくださる最終的な御国、栄光の御国を待ち望み、そこに向かう歩みをささげて行きたいと思います。